

論 説

「アウシュヴィッツの天使」と呼ばれた
修道女アンゲラ・マリア

伊 藤 富 雄

目 次

はじめに
子供時代と青春時代
メッツの修道院時代
アンゲラの逮捕
ラーヴェンスブリュック女性強制収容所
アウシュヴィッツの天使
アンゲラの最後
アンゲラに続いた医師
おわりに

は じ め に

2008年9月、私は初めて「アウシュヴィッツ絶滅収容所」を訪問した。これまで何度か訪問するチャンスはあり、実際に出かける寸前までいったこともあったのだが、最後の最後でいつも気持ちが萎えてしまった。ドイツ国内の強制収容所はすでにブーヘンヴァルトも含めて訪れたことはあったが、「アウシュヴィッツ絶滅収容所」だけはとても見るに耐えられない、と思ってしまうのだった。しかし年齢のこともあり、今回は最後の機会であり、かつまたこれは自分の果たすべき義務だと言ひ聞かせ、覚悟をきめて行くことにした。

国外留学中のウィーンからアウシュヴィッツに近いポーランドの古都クラクフへ向かった。クラクフも以前から一度訪れてみたいと思っていた街である。この美しい街は映画『シンドラーのリスト』の舞台となった「プアシュフ労働収容所」が存在していたことでも知られている。今回はまずこの収容所を訪れることにした。クラクフ市内から市電に乗って20分ほど走った所にあるプアシュフの街で収容所の所在地を尋ねてみたが、誰もが知らないと言う。ようやくある中年の男性に教えられ、丘陵地になっている収容所の跡地を訪ねた。しかしそこには「プアシュフ労働収容所」の跡地だと言う目立たない掲示板と、小さな墓が一つ、それにイディッシュ語で書かれた慰霊塔が立っているだけであり、それ以外には建物の残骸らしきコンクリートの塊が、あちこちに放置されているだけだった。私以外に人影はなく、普段でも訪れる人は殆どないような雰囲気だった。翌日訪れた「アウシュヴィッツ絶滅収容所」の扱いとは雲泥の差である。「絶滅収容所」と「労働収容所」の相違はあるとは言え、余りの扱いの相違に驚いてしまった。

翌朝 9 時過ぎの電車でアウシュヴィッツへ向かう。この日は朝から雨が降っていたが、アウシュヴィッツへ着く頃には止んでいた。アウシュヴィッツの駅はごく普通のポーランドの地方都市の駅、というたまたまだった。駅員に尋ねると、駅前から収容所行きのバスが出ているという。私を含め 4、5 名の観光客がバスを待っていた。しばらくしてやってきたバスには収容所へ向かうと思われる人は意外に少なく、地域の住人、それもお年寄りが多く乗っていた。雨に濡れた街路樹や静かなたまたまの家並みを見ながら、60 年以上も前にこの街でなされた想像を絶する残虐行為、大量殺戮の事を思い浮かべていた。絶滅収容所の所長 R. ヘスの裁判での証言によれば「250 万人以上」、最近の研究では 125 万人以上の囚人が殺害されているのである。10 分ほどバスに乗っただろうか。私の後ろの座席の老女が、次のバス停で降りるのだ、と手招きで教えてくれた。この街を訪れる外国人の目的は絶滅収容所以外にはないのだろう。私は彼女とは一言も言葉を交わしてはいないし、ましてや収容所のバス停のことを尋ねなどしなかったのだが。バス停から収容所入り口までは徒歩ですぐだった。入り口は団体客で溢れていた。いよいよ「アウシュヴィッツ絶滅収容所」へ足を踏み入れる。有名な“Arbeit Macht Frei”（「働けば自由になれる」）と書かれた門をくぐって収容所の中へ入る。2 階建ての赤煉瓦の収容棟がいくつも並んでいる。その収容棟の一つに入ってみた。するとそこにはかつての囚人たちがかけていたメガネの山、靴の山、そして女性囚人たちの髪の毛の山が積まれていた。その余りの量に圧倒され、言葉を失ってしまう。私を含め、見学者は無言で見て歩く。どの収容棟へ入っても信じられない光景ばかり。最後にガス室と死体焼却場を見る。予想はしていたが、余りの酷さに現実のことではなく、まるで映画でも見ているような気分だった。

この初めてのアウシュヴィッツ絶滅収容所訪問で私は一人の修道女アンゲラのことを知った。誰もが死の影に怯えていた苛酷な状況の中で、自らの生命を賭して他の囚人たちのために働いた彼女はいつしか「アウシュヴィッツの天使」と呼ばれるようになった。戦争終結 1 年前の 1944 年 12 月 23 日、連合軍の空襲により、彼女は命を落とした。44 歳だった。戦後 40 年以上たった 1990 年 3 月、ウィーンの大司教の館で彼女の列福審査が開始され、1992 年 3 月、ウィーンでの審査は終了した。その後審査はローマのバチカンに移され、現在に至っている。

ユダヤ人ではなくドイツ人でありながら、しかも敬虔な修道女だったアンゲラは何故アウシュヴィッツ絶滅収容所へ送られねばならなかったのか。また他の囚人たちから「アウシュヴィッツの天使」と慕われたのはいかなる経緯によるものなのか。以下、オーストリア抵抗運動資料館で入手した資料、さらに「カトリック・ドイツ女性連盟」議長で、ナチスに抵抗したキリスト教徒の女性たちの研究者である E. プレガルディーア氏から提供された資料などを元に彼女の生涯を再現したい¹⁾。

1) E・プレガルディーア氏とは帰国後もメールでのやり取りを行ない、拙論執筆の際に幾つかアドバイスを頂いた。

子供時代と青春時代

ドイツのルール工業地帯の南東に広がる山岳地域のザウアーラント。そこが修道女アンゲラ（マリア・アウチュ）の故郷である。その地域はカール大帝の時代にキリスト教化され、それ以降ザウアーラントには信仰心の厚いキリスト教徒が住むことになった。

マリアの父親は若い頃にザウアーラントにやって来たらしい。父親は熱心なカトリック教徒の労働者だった。1893年に結婚。1900年3月26日、マリアは5番目の子供として生まれる。彼女の前に3人の姉と1人の兄、彼女の後に2人の弟が続いた。誕生から2日後の3月28日、マリアは聖マルチン司祭館で洗礼を受けた。それが彼女の最初の三位一体への聖別式だった。

マリアは幼い頃から好奇心の旺盛な少女だったようだ。

「マリアは当時12歳で、野菜畑で両親の手伝いをしていた（。。。）その時一人の男性が自転車で通りがかった。自転車はその頃ようやく発明されたばかりで、前輪が大きく、後輪が小さなものだった。それはマリアが見た最初の自転車だった。彼女は手に持っていた何もかも放って立ち上がり、走り寄り、手を叩いて〈凄い！〉と叫んだ。」²⁾

マリアは陽気でいたずら好きだったが、学校では勤勉で才能ある生徒でもあった。1914年3月に学校を卒業したとき、成績は抜群だったという。しかしながら当時の大半の子供同様に彼女は上級学校には行かなかった。

マリアは12歳で聖体拝領を受けているが、その際に修道女になる許しを主にお願したという。姉エリザベートの息子が初聖体拝領を受けた1934年4月、すでに修道女となっていた彼女は修道院から手紙を書いている。

「彼は特別な恩寵を願ひ出るべきです。救世主がそれを聞き届けないことはありません。というのも私も自らそれを経験したからです。私の聖体拝領の日に私は修道女になる恩寵を救世主に願ひ出ました。あり得ないような話ですが、事実なのです。」³⁾

信仰心の厚い彼女の家庭では、起床の際には守護天使に祈りを捧げ、聖水で十字を描き、お

2) Velez de Mendizabal, Gotzon: Verzehrendes Feuer. Sr. Angela Maria Autsch: Der Engel von Auschwitz. Salterrae, 1997, S.21. この本はスペイン語で書かれたものを Franz Buhl がドイツ語訳したものである。膨大な資料と数多くの引用や証言から構成された本書は修道女アンゲラ・マリアの実像に迫っている。拙論はこの本に負うところが多かったことを付記しておく。

3) Fux, Idelfons (Hrsg.): Schriften der Dienerin Gottes SR. Angela Maria vom Heiligsten Herzen Jesu. Salterrae, 1992, S.45.

昼の鐘に合わせて再び天使に祈り、食事の際には感謝の念を述べ、夕べにはローゼンクランツの祈りを捧げ、寝る際には夜の祈りを捧げたという。

後に彼女が家族に宛てた手紙でも聖体拝領を行なうことを勧め、弟フランチには「勤勉に告解と聖体拝領に出かけるように」、姉エリザベートには「子供たちを頻繁に、いや毎日聖体拝領に連れて行くように」と書き送っている⁴⁾。

1914年3月に学校を卒業すると、マリアは姉たちと同様に、母親の家事を手伝い、小さな庭や家畜小屋の世話をした。

1914年8月、第一次大戦が勃発する。マリアの父親はすでに49歳だったので出征を免除された。

1915年4月、マリアはまず子守として働き始めた。その後婦人服専門店の見習いとなり、家計を支えることになった。その店はマリアの家から2キロほど離れた町にあり、彼女は毎日徒歩で出かけたが、後に自転車で通うようになった。婦人服専門店の人々は彼女を家族の一員のように扱い、彼女の能力を評価し、全面的な信頼を寄せた。1930年、マリアは退職するが、その折の会社の退職証明書でも彼女の熱心さ、優秀さが賞讃されている。

1921年10月、母親が病気のため亡くなった。55歳だった。マリアは修道女になり、神に仕えたいという希望と、一方で家計に窮した家族のために働かねばならない、という状況の中で大いに悩んでいる。そうした中で地元の司祭ローゼンフェルトが彼女の人生に大きな指針を与えることになった。司祭ローゼンフェルトは50過ぎの司祭で、第二次大戦後までその地方のカトリック共同体の指導者だった。マリアはこの司祭に導かれ、三位一体修道会へ入ることになる。彼女はまたローゼンフェルト司祭からナチスがキリスト教徒にとって、そもそも人間にとっていかに危険な存在であるかも教えられたが、現実にそれを身近に感じる事件が生じた。1933年、彼女たちが住んでいた辺鄙な田舎町でナチスは勝利の行進を行ない、敬虔なカトリック信者たちを従えたローゼンフェルト司祭と小さな田舎町で対峙したのだった。この事件を通じてマリアはナチスが教会の信仰とは相容れないこと、彼らは自分たちとは意見の異なる者を潰すためにはいかなる手段をも用いることを悟ったのだった。

メッツの修道院時代

ローゼンフェルト司祭は1933年2月、オーストリアのチロル州のメッツにある三位一体修道会にマリア・アウチュを推薦する手紙を送った。

「マリア・アウチュは2年前から当地で結婚している姉の元に住んでいます。この時期に私は

4) ebd., S.45.

彼女と親しくなる機会を得ました。修道女として愛する神に身を捧げるといふ想い、それは早い時期から目覚めていましたが、その想いがようやくこの数年の間に明白になったのです(。。。) 彼女は豊かな感性を有する女性です。深い敬虔さを備え、自分が着手したことは最後まで完全にやり遂げます(。。。) 神が彼女をさらに導き、修道院で魂の友を見出しますように！」⁵⁾

この手紙を読んだ修道院長はマリアの受け入れを即座に決定した。1933年5月、マリアはチロルの三位一体修道会の受け入れを申請し、同年9月、メッツへやって来る。

そして10月26日に修道女となるための修練を開始した。9ヵ月後の1934年7月4日、マリアは修道院の法服を得て、晴れて修道女となった。同時に彼女は新しい修道女の名前をもらった。この時以降、彼女は「聖なる心のイエスの修道女アンゲラ・マリア」となった。

「愛する皆さん、今日はあなた方に喜ばしい知らせがあります。7月4日、私は聖なる修道会の法服を手に入れます。さらに加えて美しい名前〈聖なる心のイエスの修道女アンゲラ・マリア〉という名前も手に入れます。私の喜びをあなた方も分かってくれるでしょう(。。。)〈アンゲラ・マリア〉という名前は観想的三位一体修道会設立者である、孤高の修道女が有していたものです。その厳しい修道会はスペインにあります。」⁶⁾

8月20日、修道院のチャペルでアンゲラは院長の前で自らの決意のほどを述べた。

「私こと、聖なる心のイエスの修道女アンゲラ・マリアは誓願を行ない、聖なる三位一体の一年の間、従順、貧困、純潔を誓います。」⁷⁾

1935年のクリスマスに姉たちに出した2通の手紙で彼女は喜びの状況を報告している。

「(。。。) 数ヶ月前から私は愛する救世主の側で眠っています。私には聖具室だけで十分です。そこはもう素晴らしいチャペルなのですから。何と素晴らしいことではないでしょうか？」⁸⁾

「(。。。) 修道院で平和と真の自由が見出されるのです。〈修道院に入る〉という言い方が示しているように、〈閉じ込められる〉ことによって実は自由を感じるのです。そうなのです。変だと

5) Velez de Mendizabal, a.a.O., S.45.

6) Idelfons, a.a.O., S.50.

7) Velez de Mendizabal, a.a.O., S.52.

8) Idelfons, a.a.O., S.57.

思うかもしれませんが、でもそうなのです。」⁹⁾

1936年4月14日、アンゲラは甥の初聖体拝領に際してメッツからではなく、チロルの山岳地から手紙を送っている。4月1日以降、新たな修道院設立のため3名の修道女がそこに派遣されていたが、アンゲラもその一人だった。その地の人々は修道女たちの到着を歓迎し、ささやかな歓迎の式典も開かれ、かなりの数の住民が参加し、司祭や市長も歓迎の辞を述べている。

ナチ支配下での厳しい社会的、経済的問題に直面した修道院にとって、アンゲラは非常に大きな支えとなっていた。病気の重かった修道院長ミヒャエーラの看病を行ないながら、修道院付属の幼稚園を運営し、さらに夕方には裁断・裁縫を教え、刺繍教室も指導した。また時間を見つけては地区の病人の世話をしたり、農家の畑仕事なども手伝った。

アンゲラの逮捕

1938年9月、聖なる心のイエスの修道女アンゲラは永遠の誓願を行ない、誓願は修道院長ミヒャエーラによって受理される¹⁰⁾。

同年、オーストリアを併合したナチスはまずは行政的・司法的にオーストリアをドイツ第三帝国に組み入れ、「オストマルク」にしてしまった。さらにはカトリック教会にも攻撃を加え、1938年10月にはウィーンの大司教公邸を襲撃する。そしてこれに抗議したカトリックの司祭たちを処刑し、さらには強制収容所に送りこんだ。次にナチスは各地の修道院の建物、資産などの没収を画策し始めた。1939年9月、アンゲラは修道院の会計を担当していたので、ナチスによる没収を防ぐために、何らかの手を打たねばと考えた。そこで彼女は、この修道院は三位一体修道院の本部があるスペインの修道会の所有物である、と主張することにした。当時のナチス・ドイツとスペインとの間の友好関係を修道院防衛のために利用しようとしたのである。アンゲラがそのためにスペインの修道会本部に手紙を送ったことを示す証拠として当時のウィーン・スペイン領事の手紙が残されている。

「尊敬する修道女アンゲラ様、

1939年9月28日付きのあなたの問い合わせに対し領事館が詳細に検討する前に、問い合わせの返事として、あなたの修道院(メッツの館)がスペインの財産であるということを示す証明しなければならないこと、しかもそのための証拠(スペイン当局、およびスペイン外務省が証

9) Velez de Mendizabal, a.a.O., S.58.

10) ebd., S.63.

明したヴァレンシアの土地登記簿抜粋、教団本部の証明書、および陳述の保証に役立つ他の証拠）が必要であることをお伝えします。

1939年10月2日、スペイン領事館¹¹⁾

アンゲラたちがそうした証拠を送ってもらうよう、教団本部に頼んだことは明らかである。そのことが効を奏したのか、ナチスは修道院が経営する幼稚園は閉鎖させたが、修道院の建物、資産の没収には手をつけなかった。しかしナチスがアンゲラのことを放っておいたわけではなく、密かに彼女をマークし、逮捕し、報復する機会を狙っていたのだ。

1940年8月10日、アンゲラは修道院近くの商店へ牛乳を買いに出かけた。その際に彼女は店に居合わせた数名の女性客達に、連合軍によってノルウェーで船舶が沈められ、大勢の死者が出た話をして聞かせた。その話を聞いたある中年の母親が帰宅後に、ナチの息子に報告した。実はこの息子はその直前にアンゲラたち修道女にラジオを提供し、自由に使用させていたのだ。彼は、修道女が禁止されている外国の放送を聞いたに違いない、と確信した。それゆえ彼はアンゲラをゲシュタポに告発した。ゲシュタポはすぐに捜査を開始した。当時店にいた女性達に、アンゲラが、「ヒトラーは全ヨーロッパにとっての災忌である」と言ったか否かを問い糺した。しかし女性達はもう覚えてはいないと、答えた。ただ上述の中年の女性だけが彼女がそうした言動を吐いたと証言し、アンゲラは逮捕された。8月12日のことだった。

こうして彼女はインスブルック警察の留置所に入れられ、17日間も拘束された。メッツの修道女たちは修道院を守る一方で、スペイン領事館にアンゲラを釈放してもらうよう頼んだ。しかしながらスペイン領事館によるアンゲラ釈放の試みは成功しなかった。修道女たちは他の方法でもアンゲラを釈放しようと努めた。病身の院長自らゲシュタポに赴き、釈放を願い出たが、満足な返答は得られなかった。院長は1941年12月17日から1943年11月1日まで少なくとも4回、アンゲラの釈放を願い出る手紙をゲシュタポに送っている¹²⁾。

アンゲラは逮捕されても実に冷静で落ち着いていた。逮捕されてから1週間後に彼女は院長宛に手紙を書いているが、自分のことよりも院長の病状を気遣っている。

「愛する院長さま、私の最初の質問はこうです。お元気でしょうか？ご病気は悪くなっていませんでしょうか？（。。）どうか悲しまないで下さい。私はとても元気ですから。」¹³⁾

11) ebd., S.68.

12) ebd., S.74.

13) Idelfons, a.a.O., S.87.

その他の手紙でも彼女は自分のことよりも、自分の件で修道院が迷惑を被り、修道女たちが酷い目に遭うのではないかと心配している。

ラーヴェンスブリュック女性強制収容所

修道女アンゲラは裁判も行われないうまま 1940 年 8 月 29 日、警察の留置所からラーヴェンスブリュック女性強制収容所へ送られた。この収容所はベルリンの北 90 キロのフルステンベルク湖ほとりの沼地に建設されたものである。1939 年 5 月には最初の囚人を受け入れる用意が整い、8 百名以上の女性囚人が送られてきた。第二次大戦が始まるとポーランドなどから大勢の女性囚人が送られてきたが、囚人たちの内、政治犯は赤のワッペン、反社会分子は黒のワッペンを付けることになっていた。女性の囚人だからと言って容赦されることはなく、1 日の強制労働時間は 12 時間もあった。収容所に抑留された囚人の数は 13 万人以上、その内抑留中に亡くなった囚人の数は 6 万人以上だったと言われている。

アンゲラの強制収容所への移送に関してはほとんど分かっていない。心配をかけたくないと考えたのだろう、アンゲラは修道院宛の手紙では一切そのことには触れていない。しかし彼女が強制収容所の他の囚人と同じ運命をたどったことは間違いない。強制収容所への「移送」そのものも過酷なものだったらしい。小突かれたり、殴られたりしながら貨物列車で移送される。餓え、喉の乾き、寒さ、暑さに悩まされながらの移送。移送の途中で亡くなる囚人たちもいた。強制収容所に到着した囚人たちの最初のショックは、強制収容所の周囲を取り囲んだ有刺鉄線、並んで立っているバラック、自動小銃を抱え、獐猛な犬を連れた SS 兵士、残忍そうな看守、青と灰色の縞模様の囚人服を着たやせこけた囚人たち。

ラーヴェンスブリュック女性強制収容所を生き延びたアントニア・ブルハは彼女の体験をこう記している。

「(。。) 私たちは 2 時間ほど医者が来るのを待ちました。シャワールームはその間に冷えて寒くなり、私たちは凍えてしまいました。ようやく SS の制服を着た 5 名の男性がやって来て、一人が横柄な態度でベンチに腰を下ろしました。彼の背後には一人男性囚人が立っていました。

こうして SS 兵士の前での痛ましい裸のパレードが開始されたのでした。多くの若い女性達は泣き始めました。好色な視線と卑猥な冗談が屈辱的でした。SS 兵士たちの誰も、医師すらも私たち囚人の病気の兆候に何の関心も抱いてはいませんでした。」¹⁴⁾

アンゲラも同じような体験をしたに違いない。彼女は囚人番号 4651 として扱われることに

14) Velez de Mendizabal, a.a.O., S.84ff.

なった。彼女がどれほど侮辱され、打ちのめされたことか、想像がつく。しかし彼女にはそれを乗り切る信仰があった。

収容所到着後、アンゲラは収容所の葉書で院長に宛てて葉書を送っているが、移送の苦しみや収容所での辱めなどには一切触れていない。

「私の正確なアドレス：マリア・アウチュ ナンバー 4651, ブロック 8

愛する院長さま、そしてヨハンナ。土曜日に無事に当地へ到着しました。私は元気です。あなたもそうであることを祈っています。愛する院長さまの健康状態は如何でしょうか？ちょっとした小物を買うために 15 ほどお金をお願いしても宜しいでしょうか？どうか皆さんに私のことをお伝えください。そして修道院とあなた方に心からの挨拶を送ります。マリア」¹⁵⁾

保護検束の囚人は 1 ヶ月に 1 回の手紙ないしは 1 枚の葉書しか送ることも、受け取ることも許されなかった。また保護検束の囚人宛の手紙は楷書で便箋一枚に 15 行しか書くことを許されなかった。葉書は 10 行だった。小包の受け取りは許されなかったが、送金は許された。アンゲラが囚人時代に書いた手紙は 67 通残っている。当時のナチスの検閲は厳しく、時に手紙を没収したり、破いたり、インクで読めなくしたりした。しかしアンゲラは検閲回避の名人だった。マリアという名前は知られていたのだから、セカンドネームのツェツィリアを短縮したツイレルの名前を、それも 3 人称で使用して書いたり、修道女名アンゲラを使用した。例えば「いつまたツイレルは彼女の親友の男友達の訪問を受けるのでしょうか？」と書かれた場合には「私が再び聖体拝領を受けることができるのはいつのことでしょうか？」という意味になるのだった。

収容所でのアンゲラの様子を多くの囚人たちが手紙や回想録などで語っている。ナチス時代にユダヤ人に次いで迫害されたジプシーの女性の一人、M. ローゼンベルガーは 1990 年 6 月、あるインタビューで答えている。

「新聞でマリア・アウチュの列福の審理のことが報告されていました。私は写真を見てすぐに彼女だと分かりました。私達はラーベンスブリュックの強制収容所に一緒にいました。マリアが強制収容所を生き残れなかったことは知っていました。しかし後にアウシュヴィッツで彼女に何があったのかは、知りませんでした。マリアは最高の思い出の中にいます。ある人物が聖者のようだ、あるいは神聖な人だと言われるとしたら、それは彼女に当てはまると思います。

15) Idelfons, a.a.O., S.98.

彼女はいつも私を助けてくれました。私は当時20歳で、彼女は私より倍の年齢で、私にとって母親のような存在でした。彼女はいつでも私に勇気を与えてくれました（。。）マリアは暗い地獄の中の太陽のような存在でした。

自分の食べ物を他人に譲ってしまって、一体あなたは何で生きているのですか、と私は何度か彼女に尋ねました。すると彼女は、お腹が空くと、祈りを捧げるのです、と答えたのでした（。。）

私が生き延びたのは、マリアのお陰です。彼女は私をいつも助け、勇気を与えてくれたからです。」¹⁶⁾

さらにある別の囚人はこう証言している。

「（。。）末の子供が9歳の、6人の子供の母親である別の囚人は絞首刑にされました。6人の子供たちも一緒にです。それを私たち囚人は全員見ていなければなりません。私はそのことを思い出したくもありません。思い出すと身体が震えてしまうのです。憂鬱に苛まれてしまうのです。自殺しようと思ったことも何度もあります（。。）私がそれを克服できたのはマリアのお陰です。彼女は再三にわたって私を助けてくれ、勇気を与えてくれました（。。）彼女が身近にいると生まれ変わったような気がしました。」¹⁷⁾

1941年8月、修道女アンゲラはブロック1に移され、そこに翌年3月25日まで留まった。この時期、彼女は病人たちの世話をしている。そこで彼女は社会主義者のR・ヨッホマンと知り合った。R・ヨッホマンはブロックの最年長で、反ナチスの抵抗運動を行なった勇敢な女性だった。彼女の思い出から修道女アンゲラの様子が浮かび上がってくる。

「（。。）（彼女は）どんな状況にあっても助言者、援助者になってくれました。彼女は毎日食事の入った重いバケツを運んでくる、と言ってききませんでした。ある時病気で弱った女性がトイレの掃除ができないのを見て取ると、彼女はその女性の手からバケツを取り、彼女に微笑みかけ、さっさと掃除をしたのでした。全ての囚人が彼女を愛していました。政治犯であれ、犯罪者であれ、彼女は時間さえあれば何時間も側に座って嘆きを聞いてやったのでした。ある娼婦が顔を輝かせながら私に〈ねえ、私には分かったのよ。私でも天国へ行けることが。だって神様は私を許してくれるのですから〉と言ったことをありありと覚えています。

囚人同士はお互いを親称の〈あんた〉と呼び合っていました。でも奇妙なことに——取り決

16) Velez de Mendizabal, a.a.O., S.103ff.

17) Mikrut, Jan: Blutzeugen des Glaubens. Martyrologium des 20. Jahrhunderts. Wien, 1999, S.31f.

めた訳でもないのに——修道女に対しては敬称の〈あなた〉を用いていました。もちろんアンゲラに対しても〈あなた〉でした（。。。）

ある時とつぜん一人の看守が18歳の若い女性を鞭で殴ろうとしたことがありました。するとアンゲラが看守の鞭を握って〈どうしてこんな少女を殴ろうとするのですか？この子は何もしてはいませんよ！〉と叫びました。私は心臓が止まるほど驚きました。というのも間違いなくアンゲラが懲罰ブロックに入れられ、殴られると思ったからでした。でもそうならなかったのです。看守の女性はアンゲラの顔をじっと見詰めて、そのまま行ってしまったのです。それは奇跡のように思われました。後に思ったのですが、今日でもそう思っているのですが、アンゲラにはその独特の雰囲気による特別な輝きがあったのです。（。。。）ある時散歩のさいに私は彼女のポケットにパンを一枚押し込んで、〈これを食べなくてははいけません。だって神は私達が生き残ることを望まれているのですから〉と言いました。数日後、私が再び彼女のポケットの中に手を入れると、固くなった例のパンがあったのです。アンゲラは〈私は他の人たちより多くは欲しくないのです！〉と謝りました。』¹⁸⁾

このR・ヨッホマンのラーヴェンスブリュック女性強制収容所の思い出からもアンゲラが後に「アウシュヴィッツの天使」と呼ばれることになるのが頷ける。

アウシュヴィッツの天使

修道女アンゲラは1942年3月26日、その日は奇しくも彼女の誕生日の日だったが、アウシュヴィッツ絶滅収容所へ移送される。それは999名からなる最初の女性囚人のアウシュヴィッツへの移送だった。アンゲラには新たに囚人番号512が与えられた。

収容所に到着すると囚人たちは衣服を含めた所有物の全てを剥奪された。ナチスは単に剥奪することだけが目的ではなく、この最後の剥奪が及ぼす心理的効果を知っており、囚人たちの意欲を挫き、囚人たちを侮辱するために最後まで利用したのだった。アウシュヴィッツ絶滅収容所を生き延びた心理学者のフランクルは『夜と霧』の中でこう書いている。

「（。。。）われわれはこの笑うべき全裸の生命の他に、失うべき何ものもはや持っていないことを知ったのであった（。。。）苦悩する者、病む者、死につつある者、死者——これらすべては数週の収容所生活の後には当たり前の眺めになってしまっ、もはや人の心を動かすことができなくなるのである（。。。）無感覚、感情の鈍麻、内的な冷淡と無関心——収容所囚人の心理的反応の第二段階。』¹⁹⁾

18) Velez de Mendizabal, a.a.O., S.108ff.

19) V.E. フランクル：夜と霧 みすず書房、1976年、93、102、103頁。

フランクが指摘した、人間を全てに対して無関心、無感覚にしてしまうアウシュヴィッツ絶滅収容所内での生活がいかに過酷なものであったかは容易に想像がつく。しかしながらアンゲラはそのような耐え難い収容所内の生活の中で「苦悩する者や病む者」に対して無感覚、無関心になることはなかった。彼女はそうした収容所での生活を神の元へ行くための修行時代と見なしていたからである。

「ツイレルは修業時代で消耗などしてはいません。彼女は人生に於いて困難に出会っても、その困難を、自分自身を克服したのです。彼女は自分が学ばねばならないこと、そしていつかは試験に合格しなければならないことが分かっているのです。」²⁰⁾

アンゲラは一日も早く元の修道院の生活へ戻りたいと願ってはいたが、主が望むのであれば、主の意思に従うべきであるとも考えていた。

「(。。。) 本当に近い内の再会を希望しています。でももし主が、それで良いのだとお考えであれば、それで満足しなければなりません。」²¹⁾

「主の意思」に従い、過酷な収容所生活を「修行時代」と見なしていたアンゲラは他の囚人のために身を捧げていく。アンゲラより二日遅れてアウシュヴィッツに送られてきた M. シュヴァルボヴァはユダヤ人の小児科医で、反ナチスの勇敢な闘士だった。彼女はアンゲラとの初めての出会いを記している。

「(。。。) 一人の背の低い、華奢な女性が私の方へやって来た。彼女はばら色の頬と大きな青い子供のような目をしており、上品な金髪だった。(私は看護婦のアンゲラです)、そう言って私を勇気付けるように微笑み、髪を剃られて丸坊主にされた私の頭を撫でてくれた(。。。)

夕方自分のベットに行くと、熱い湯の入った金だらい、石鹸、歯ブラシ、清潔なタオル、ハンカチ、下着が用意されていた(。。。) ベットの傍のお皿には数個の角砂糖、ケーキ、それにレモンまでも用意されていた(。。。) それらはすべてアンゲラが用意してくれたものだった(。。。) 私達は最初の日から友人同士となった(。。。)

収容所の中で仲間の囚人のために苦しんでいる人を助けることは、当然であり、自然なこととして、実に偉大な人間的な心からアンゲラはそうしたのだった(。。。) 彼女は自らの命をも

20) Idelfons, a.a.O., S.115.

21) ebd., S.168.

危険に晒したことも数えきれないほどあったが、他人を助けることを躊躇したことはなかった。彼女はまっすぐに輝いている道を進んだのだった。」²²⁾

またアウシュヴィッツ絶滅収容所を戦後まで生き延び、アンゲラの死を最初にメッツの修道院へ知らせた S. バーダーは「(。。) ここで私はアンゲラに、囚人仲間からそう呼ばれているアウシュヴィッツの天使に出会ったのです (。。) そこで私達は半年間、一緒に働きました」と書き、さらにアンゲラが誰からも愛されていたことを述べている。

「私がアウシュヴィッツに到着したとき、私はまず SS 事務所で宣誓させられました。私がそこで聞いたり目にしたことを外部で話してはならないということでした (。。) 野戦病院は監視されている収容所の外にありました。毎朝監視の兵士たちが門を通して囚人たちを病院や他の作業場所へ連れて行きました。その中にアンゲラもいたのです (。。) 彼女は回りにどんな辛いことがあっても、特別な微笑を浮かべていました。彼女は病人に、看護婦に、それどころか SS 隊員にすら好意的でした。全ての人が彼女を愛していました。」²³⁾

ここで書かれているようにアンゲラは SS の野戦病院で看護婦として働いていた。その働き振りを評価され、病棟の管理人に相当する職務に就き、病棟の食糧管理も任されるようになった。彼女はそうした立場を利用し、自らの身の危険も顧みず、可能な限り囚人たちに救いの手を差し伸べたのだった。M. シュヴァルボヴァは書いている。

「(。。) アンゲラは SS 隊員の目を誤魔化し、必要な品を囚人たちに配布した。毎日数百名が病棟で亡くなっていたが、アンゲラは食料の割り当てを (。。) 死者の分も含めて手にしていた。そしてその余った分を回復しつつある病人や女性達に配ったのだった (。。) さらに収容所で最も貴重で、価値のある水も分け与えた (。。) 彼女は極めて危険な橋を渡りながら囚人たちを手助けた。」²⁴⁾

アンゲラは多くの病気の囚人たちの面倒を看なければならなかった。発疹チフスに罹り、虱まみれの M. シュヴァルボヴァの身体を毎日拭き、スープや食事を運び、虱を潰しながら看病したこともあった。そんなアンゲラ自身が病気になったこともある。1942年10月15日、彼女は修道院へ葉書で自分が重病であることを告げている。

22) Schwalbowa, Margita: Elf Frauen. Leben in Wahrheit. Wien, 1994, S.21f.

23) Velez de Mendizabal, a.a.O., S.152.

24) Schwalbowa, a.a.O., S.25.

「私はツイレルが重い病気であることに驚いてはいません。というのもそうした予感がしていたからです。8日間、40度から41度の熱が続き、危機的状況でしたが、もう良くなるでしょう。私たちは全員、彼女のために祈りたいと思います。」²⁵⁾

M. シュヴァルボヴァはその時の様子を書いているが、自らが死に瀕した、そんな重病の際にもアンゲラは自分のことよりも囚人たちのことを気にかけていたのだった。

「(。。。) しばらくして彼女自身が発疹チフスに罹った。アンゲラは40歳台で、かなり深刻な心臓の欠陥があった。私は彼女の生命を危ぶんだ。昼も夜も熱にうなされた。ある朝彼女は私に言った。(私は大きな発見をしたのよ、そしてナチスの連中が私からそれを買取ろうとしているの。代償に私に自由とかなりの額の金額を約束するというの。でも私はその約束は拒否したの。その代りに私は一つだけ条件を出したの。その条件を満たしてくれるなら、私の秘密を打ち明けると。) どんな条件なの? と私はアンゲラに尋ねた (。。。) (もし囚人を全員解放してくれれば、ドイツ人もポーランド人もロシア人もユダヤ人もジプシーも全員、そうしたら私の発見を打ち明けるわ!) それ彼女条件だった。」²⁶⁾

熱心なカトリックの修道女であるアンゲラにとってクリスマスは特別に大切な日であることは当然ではあるが、彼女はクリスマスに囚人たちの苦悩を和らげる絶好の機会だと見なした。そのためにアンゲラは多くの困難を乗り越え、収容所内でのクリスマスの祝いを計画し、普段の夕食よりも品数を増やし、なんと小さなプレゼントまで用意したのだった。M. シュヴァルボヴァは1942年のアウシュヴィッツ絶滅収容所内での、そのクリスマスの夕べのことを記している。

「(。。。) 1942年のクリスマス。数千名の囚人たちが家庭や、光に輝くクリスマスツリーの飾られた部屋に、暖炉ではぜる炎、子供たちの大きな瞳に想いを馳せた (。。。) アンゲラは大きな鍋でクリスマスのスープを作った。部屋の真ん中には小さなクリスマス・ツリーもあり、それどころかローソクも暗闇に輝いていた。アンゲラは私達の一人一人に小さなプレゼントを用意していた (。。。) 私達の部屋にほとんど全てのヨーロッパの国々のクリスマス・ソングが響き渡った (。。。) 私は収容所の中で、静かな、ハーモニーに満ちた、感動的で歌うような静寂を体験したのだった。」²⁷⁾

25) Idelfons, a.a.O., S.154.

26) Schwalbova, a.a.O., S.24f.

27) ebd., S.29.

アンゲラはその後すぐに SS の野戦病院へ移された。M. シュヴァルボヴァはそのためアンゲラにはそれ以降は数回、それもほんの短時間しか会えなかった。

「(。。。) SS の野戦病院の近くで働いていた女の子たちが時折アンゲラからの挨拶を届けてくれた。(。。。) アンゲラはしばしば野戦病院を抜け出し、戸外で働いている囚人たちに食べ物や、暖かいお茶、洗濯された肌着やタバコを運んでいった。それらは間違いなく SS 隊員からくすねたものだった。彼女は子供のような微笑みを浮かべてそれを行なったのだった」²⁸⁾と M. シュヴァルボアは記している。

アンゲラの最後

1940年8月からラーヴェンスブリュック女性強制収容所に、その後1942年3月からはアウシュヴィッツ絶滅収容所に収容された修道女アンゲラの収容所での生活は4年を超えてしまう。彼女の残された手紙からは、相変わらず「自由」になることを期待した言葉が見られるが、次第に悲観的な影が差し始める。彼女は修道女たちに宛てた手紙で「それを主がお望みであれば」主の意思に従うつもりであり、自分の解放のためにもはや色々手を尽くす必要がないことを述べている²⁹⁾。

そして運命の日がやってくる。そのようなアンゲラの死を囚人仲間の誰が予想したであろうか。

1944年12月23日、アンゲラを始め囚人たちの誰もが待ち望んでいた「聖夜」の前日、アウシュヴィッツの SS 宿舎と SS 野戦病院が連合軍の爆撃を受けたのだった。目撃者の証言ではアンゲラは爆撃の破片を身体に受けて倒れ、ほぼ即死状態だったようである。東から迫っていた赤軍による収容所解放のわずか35日前のことだった。彼女の遺体は焼却炉で焼かれてしまった。後日、収容所の関係者がアンゲラの「遺灰」と称して壺を義兄やメッツの修道院に送ったようだが、M. シュヴァルボヴァは、アンゲラは他の囚人と一緒に焼却されており、それは「茶番」でしかないと書いている³⁰⁾。またメッツの修道院は壺の受け取りを拒否している。

M. シュヴァルボヴァは12月23日当日の状況とアンゲラの死をこう記している。

「(。。。) 1944年12月23日(。。。) 私は野戦病院の隣にある私たちの小さな部屋に入り、仲間に向かって言った。〈今日はきっと空襲があるわ。まるで昼間のように明るいもの〉。私がそう言い終

28) ebd., S.29.

29) Idelfons, a.a.O., S.152.

30) Velez de Mendizabal, a.a.O., S.161.

えるや否や、恐ろしい爆発がブロックを揺るがした。私たちは無意識に頭を押さえた (。。。) SS の野戦病院が直撃されたことを知らされた (。。)。多数の SS 隊員が死亡し (。。。), ただ一人女性が爆弾の破片で負傷したとのことだった。〈アンゲラはどうなったの?〉と私は尋ねた。〈アンゲラは亡くなったわ! 心臓麻痺で!〉それが答えだった。聖夜の前日のことだった。』³¹⁾

また 1944 年 12 月 31 日に S. バーダーはメッツの修道院長 M. ロートに宛てて以下の手紙を書いている。

「残念ながらアンゲラさんはクリスマスを天上でお祝いされたことをお伝えしなければなりません。12 月 23 日の午後 7 時 45 分に一機の飛行機が飛来しました。警報も鳴らない内に飛行機は 2 発の爆弾を投下していきました。部隊がちょうど出動するところでした。アンゲラさんは肺に爆弾の破片を受け、すぐに亡くなりました。全員が悲しみにひしがれ、彼女の周りに立ち尽くしました。彼女は全ての人間にとって母親だったのでした。彼女は愛と、良き模範とで抜きんでており、全ての人を慰める術を心得ていました。彼女は私の手を握り、聖夜に私のことを想ってくれるように、と言いました。そして数分後、彼女は神の御子の側に赴いたのでした (。。。)

彼女はこの世に生きるには善良すぎたのです。それ故神の御子が彼女を連れて行かれたのです。』³²⁾

後年、三位一体の修道女たちはウィーン郊外のメードリンクの修道院の墓地にアンゲラのために記念碑を建てた。またオーストリアの詩人 E. デガスペリが彼女のために捧げた詩はアンゲラを彷彿とさせるものである。

(。。。)

にこやかにあなたは私に

生の神の存在を示してくれました

死の収容所の中で³³⁾

アンゲラに続いた医師

修道女アンゲラが亡くなるほぼ 10 カ月前の 1943 年 2 月に一人の「民族ドイツ人」である

31) Schwalbova, a.a.O., S.29f.

32) Velez de Mendizabal, a.a.O., S.157.

33) ebd, a.a.O., S.161.

女性医師 E. リングェンスがアウシュヴィッツ絶滅収容所に送り込まれている。彼女は 1908 年にウィーンに生まれ育ち、ウィーン大学で法律を学んだ後、ミュンヘン大学で医学を学び医師となった。彼女は夫と共にナチスの迫害から国外へ逃れようとするユダヤ人の手助けをしていたが、ゲシュタポが送り込んだスパイの罠に落ち、1942 年 10 月に逮捕された。「お前たちがユダヤ人の運命にそれほど関心があるのなら、連中と運命を共にするがいい」³⁴⁾ そうゲシュタポは言って、翌年 2 月に彼女はアウシュヴィッツ絶滅収容所に送り込まれることになった。彼女がアウシュヴィッツに到着した時には、すでに殺人工場としてのアウシュヴィッツ絶滅収容所はフル稼働していた。彼女と共に送り込まれた 34 名の女性囚人の内 27 名は 1 年後に殺害されている。しかし E. リングェンスはまだアウシュヴィッツ絶滅収容所が殺人工場であるという事実を知らなかった。彼女は死体を燃やしている焼却炉から立ち昇る煙を暖炉からの煙だとさえ思っていた。しかし間もなく彼女もその事実を知ることになるが、その契機は BBC のラジオ放送だった。

「私は数百万の人々に対する組織的な殺人のことは何も知りませんでした。ある時 BBC の放送でトーマス・マンの話を聴いたことがありました。彼は、確かな筋からの情報で知ったのだが、自分の故郷のリューベックで 50 名の若いユダヤ人に人体実験がなされ、彼らはそれともとで亡くなった、と言ったのでした。私は、トーマス・マンは未確認の噂を繰り返したのではない、と確信しました。彼は数百万の人々の殺害についてではなく、僅か 50 名の殺害についてしか述べませんでした、私にはそれで十分でした。」³⁵⁾

「民族ドイツ人」であり、医師でもあった E. リングェンスは比較的恵まれた待遇を受け、収容所でも医師として働くことになった。彼女は当初、他の囚人より倍のパンを食べ、あらゆる虐待からも免れている自分は、そもそも「囚人」と言えるのだろうか、と自問している³⁶⁾。しかし彼女はすぐに自分の恵まれた状況を利用し、修道女アンゲラ同様、身の危険を顧みず、他の囚人たちのために力を尽くすことになる。ある時は選別の際にガス室送りが確実だった 19 歳の若い女性を自分の下で看護婦として働いていると嘘をつき、救ったこともあった。しかし 700 名以上もの患者の面倒を看なければならぬ医師である E. リングェンスは、不足した医薬品をどの患者に与えるべきか、常に悩まざるをえなかった。それは誰に生き残るチャンスを与えるのかという判断を強いるものでもあったからである。子供が自宅で帰ってくるのを待つて

34) Lingens, Ella: Eine Frau im Konzentrationslager. Monographien zur Zeitgeschichte. Schriften-Reihe des Dokumentationsarchivs, Wien/Frankfurt/Zürich 1966, S.14.

35) ebd., S.11.

36) ebd., S.7.

いる 40 代の母親に与えるべきか、あるいはまだこれからの人生のある若い少女に与えるべきか。ある時、E. リングェンスは逮捕される以前からの知り合いで発疹チフスに罹っていたユダヤ人女性を助けるために薬を投与しようとした時、同僚の男性医師から、そんなことをすれば未だに「ユダヤ人支援」を行なっているとして、SS から酷い措置を受けることになる、と警告される。しかし彼女は助ける決心をした。

「私が今諦めれば(。。。)私はドイツ民族が犯している過ち、全世界から道徳的に有罪だと罰せられる過ちを犯すことになるのです。あらゆるおぞましいことを命じ、実行した人はそれほど多くは存在しません。でもそれを阻止する勇気がなくて、それを生じるがままにさせた人は無限に多く存在するのです。」³⁷⁾

E. リングェンスはそのユダヤ人囚人に薬を投与したが、そのことでドイツ人の囚人たちから、彼女はユダヤ人を助け、自分たちドイツ人を見殺しにしている、と非難された。

こうした E. リングェンスと修道女アンゲラはアウシュヴィッツで会うことはなかったのだろうか？先も述べたが、時期的には二人は 10 カ月ほどアウシュヴィッツに共にいたことになる。当時アンゲラは囚人病棟ではなく、SS の野戦病院で働いていたが、時には抜け出して囚人たちの面倒も看ていたようである。そうした「アウシュヴィッツの天使」と呼ばれたアンゲラのことを E. リングェンスが耳にしなかったはずはないし、アンゲラにしても自分と同じように身を危険に晒しながら他の囚人たちのために献身的に働いている医師 E. リングェンスのことを知らなかったはずはないと思われる。しかしながら二人がお互いのことに触れた手紙や文章を見つけ出すことは出来なかった。戦後まで生き延びた E. リングェンスはアウシュヴィッツ強制収容所での体験を詳細に記しているが、そこにもアンゲラの名前は出てこない。あくまでも推測ではあるが、二人はお互いのことを知り、意識し合い、心強く思っていたのではないだろうか？そしてアンゲラは自分に続く人物が来てくれたことを誰よりも喜んでいただろうか？

お わ り に

以上、修道女アンゲラの生涯を彼女の手紙や彼女と共に生きた囚人たちの証言を元に描いてきたが、描きながら常にもう一人の修道女のことを頭を離れなかった。それはアンゲラと同じく修道女でありながらナチスによって断頭台へ送られ、命を落としたマリア・レステイトウタのことである。彼女の詳細は拙論³⁸⁾をお読み頂きたいが、両者に共通しているのは、ごく些

37) Adler H.G, H.Langbein, E. Lingens (Hrsg.): Auschwitz. Zeugnisse und Berichte. Frankfurt, 1962, S.129.

38) 伊藤富雄：ナチスによって断頭台へ送られた修道女—シスター・マリア・レステイトウタ —立命館経

細な事で密告され、ナチスに裁かれ、結果的にそのために命を落としていることである。さらに両者の信仰心の厚さである。アンゲラは修道院へ戻りたいとの気持ちを吐露するが、その一方で「主」が望むのであれば、「主」の意思に喜んで従うと言う。同様にマリア・レスティトゥータも「主」が望むのであれば喜んで自分の生命を捧げると言い、修道院長に宛てた手紙で「ゴルゴダの丘」へ向かって「喜んで登って行きます」と書いている。信仰心のない私には理解できないが、そこまで信仰できることを羨ましくも思う。

最後にアンゲラが当局からの検閲を免れた唯一の手紙を紹介しておこう。アンゲラが収容所に入れられて3年4ヶ月経った1943年12月12日、彼女と同郷の、ある監視兵が休暇で出かける折に、アンゲラの家族に密かに手紙を渡してやると申し出たのだった。信頼の於ける彼の申し出を受けたアンゲラは喜んで手紙を書いて、彼に託したのだった。従ってこの手紙はアンゲラが検閲を恐れることなく、自らの想いをそのまま隠すことなく吐露した貴重な手紙だと言えよう。

「私の愛する、大切な院長様、愛する修道女の皆さん、愛するパパ、そして兄弟姉妹。あなた方に手紙を書けることを非常に嬉しく思います。12月1日付きの私の手紙は今日か明日中には届くと思います。もし院長様が私の様子を伺いたいと希望なさる場合には、この手紙を届けてくれる親切な方がミュルハイム＝メーネに休暇で2週間滞在されていますので彼にお尋ねください。彼は我々の野戦病院にいたことがあり、私は彼のために色々物資を調達してあげました。ザウアーラント出身の彼と知り合いになれた時、どれほど嬉しく思ったことでしょう。私の愛する、美しいザウアーラント、私の美しい故郷、私はもう一度故郷の大地を踏むことが許されるのでしょうか？そして私の第二の故郷である、美しいチロルの山並み、私はもう一度目にしたいと思います（もしもそれが神のご意思であるのなら）。大地と私たちの愛する修道院の敷居に口づけしたいと思います。愛する慣れ親しんだチャペルの中に、愛する主の元に駆け込みたいと思います。主は3年4カ月前の今日、私を見知らぬ世界へ送り込まれました。私が主と一体化した素晴らしい時間を過ごすことを許されたあの場所へ、主は私を再び連れ戻してくれるのでしょうか？想い出、それも素晴らしい想い出、それは何の役に立つのでしょうか？こうした渴望や憧れは何の役に立つのでしょうか？真に役立つものはただ一つ、全能の主のために、主と共に苦しむことだけです。主の護ってくれる御手は私の頭上でその時まで感じられました。そうなのです。我々は盲目的に主を信頼し、我々は涙を全て主のために泣かずに捧げるのです。あらゆる感傷は去って行くべきです。ラーベンスブリュック収容所での最初の3週間を除けば、私は病棟の看護婦でした。その後アウシュヴィッツでは病棟の管理人などを務め、病棟にある

約 3 千人分の食糧を管理しました。5 月 15 日以降は S S 野戦病院にいます。全てが十分そろっていて、不足しているものは何もありません。私は台所にいます。ここで私は立ち直り、今までにないほど肥っています!!! 私たちの愛する美しい故郷はどうなるのでしょうか? 愛する修道女仲間は今でもなお修道服を身にまとっているのでしょうか? 愛する神が私たちに間もなく待ち望んでいる平和をもたらしてくれますように。もうあなた方の所にも爆弾が落ちたのでしょうか? もし私の身内で誰かが亡くなったとしたら、詳しく知らせて下さい。気を使わなくとも構いません。私は気丈夫ですし、どんな事にも耐えることができますから。皆さん全員が元気であることを望んでいます。(眠っている) 幼子イエスと共に皆さんに心からのクリスマスの挨拶を送ります。私たちのためにイエスがお生まれになった時が、祝福されますように。私たちはさらに港に向かって進んでいます。日毎、私たちは目的地に近付いています。心からの平和の口づけと、心からの握手を皆さん全員に贈ります。イエスの愛に包まれている私は、あなた方の娘であり、修道女マリアです。」³⁹⁾

この手紙から 1 年後の 1944 年 12 月 23 日、アンゲラは亡くなった。

39) Idelfons, a.a.O., S.175ff.